

6. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その48)】

珍しいオガワコマッコウの漂着

2004年8月26日の早朝、大型台風16号の接近が懸念される番所崎先端の外洋に面した浜にクジラが横たわっていた。当時、京都大学瀬戸臨海実験所の院生だった小林亜玲さんが発見した(図)。その知らせを受けて、元職員の田名瀬英朋さんや同院生の河村真理子さんらとともに現場に駆けつけた。この個体は人間より多少大きかった。頭部のすんなりとがった形状とともに、背鰭が比較的幅広くて先端がとがり、その後縁がくぼんでいる点からみて、オガワコマッコウのように思えた。おちょぼ口で目が小さく、マッコウクジラをずっと小さくしたような形をしていた。既に死亡しており、黒光りする体表には、わずかなかすり傷を残してひどい外傷は見当たらなかった。死因は外見からは分からない。頭頂部をよく見ると、中央より左にかたよって開いている鼻(噴気孔)から泡が出ていた。体内でガスが湧き始めているようだ。



図. 白浜町番所崎に死亡漂着したオガワコマッコウ(腹面図)

オガワコマッコウの特徴

コマッコウ属は世界でコマッコウとオガワコマッコウのたった2種しかいない。オガワという名前は、日本のクジラ類研究者の小川鼎三博士に献名されたものだ。両種はよく似ており、1966年まで同種扱いされていた経歴がある。オガワコマッコウは背鰭が長く、解剖学的には、喉に短い不規則な1、2本の溝があるコマッコウとは異なる識別点がある。頭部の形状に加えて、目のすぐ後方にある白い模様（偽鰓＝ぎさい、かつこ斑とも呼ばれる）、背鰭の形、口のつき方、下顎にある鋭くとがった歯などで、一見すると、イルカよりもむしろサメに似ている。しかし、なんといっても、尾鰭はクジラ・イルカ類特有で、海表面に平行して伸びている。

その日には、県と白浜町にも連絡が取れて、DNA分析用の肉片サンプルを切り取る許可を得た。そこで、まず、金切鋸で背鰭を切り取ろうとしたが、相当硬くて手間取った。だが、田名瀬英朋さん愛用の磨き上げた出刃包丁が、肉片も含めて切り取りに威力を発揮した。肉片などを切り取っても腐敗臭はほとんどなかった。下顎も切り取って、歯をできるだけ多く回収した。これらは氷点下80度で冷凍保存した。

国立科学博物館勤務のクジラ類専門家である山田 格博士から、同定など様々な助言があった。また、山田博士らが作成された、この数百年間の漂着や漁獲中にかかったクジラ類のデータをまとめたインターネットサイトにアクセスさせて頂くことで、オガワコマッコウやコマッコウが、これまであまり記録がないことが判明した。山田博士はこの漂着個体を採りに来ようとされたが、おりからの高波などで流失してしまったのは残念だった。

オガワコマッコウの生態

2004年までの段階だが、過去50年ほどの期間中に白浜町沿岸に3科8属8種17頭のクジラ・イルカ類の漂着・迷入記録がある。上記の発見によって記録は更新され、4科9属9種18頭となった。

当時、わが国でのオガワコマッコウの漂着記録は、太平洋側では千葉県銚子市から沖縄県石垣市まで、日本海側では石川県と福岡県の全部で20例ほどしかなかった。オガワコマッコウは、世界中の熱帯から温帯海域にかけて生息しているとされるが、野外での観察例は少ない。この理由は、外洋性で、大陸棚縁辺部を越えた300mくらいまでの深い場所に生息することによる。加えて、一般的にクジラ類は海面上で浮かんだまま前進するのだが、本種は、ゆっくりと慎重に上がってきたら、すぐに姿を消す性質があることにもよる。オガワコマッコウが海面より飛び跳ねる行動をして尾鰭から落ちたり、腹から着水するシーンが目撃されたこともある。

他にも興味深い行動が知られていて、コマッコウも同様なのだが、驚くとイカ墨の様に糞をばらまいて煙幕をはるという。また、腸から赤褐色の液を排出して姿をくらまし、逃亡する技をもつという。社会行動としては、群れをつくる場合でも小さなもので、10頭以下とされている。だが、普段は単独行動をするらしい。

オガワコマッコウは、体長 2.1~2.2m で性成熟する。今回の個体は 2.4m あったので、りっぱな成体だ。最大記録の体長 2.7m には及ばなかったものの、最大体重が 210kg だから、今回の個体は 200kg くらいはあっただろう。約 9 カ月の妊娠期間の後に、体長 1m ほどの新生児を一頭産み、しばらく授乳して育てるらしい。食物はマッコウクジラと同様で、小形のイカ類や魚類、エビ類を捕らえているそうだ。この他に、クラゲ類も食物となっているらしい。